

# 産褥熱ニ因ル轉移性眼炎

金澤醫科大學眼科學教室(主任倉知教授)

宇都宮好雄

Yosio Utunomiya

(昭和21年3月16日受附)

## 目 次

- |           |        |
|-----------|--------|
| 1. 緒 言    | 4. 結 論 |
| 2. 症 例    | 文 獻    |
| 3. 考按並ニ總括 |        |

## 1. 緒 言

・碩學河本教授ヲシテ「予ハ眼科ニ衣食スル爰ニ略ボ30年ナレドモ、ソノ實例ニ遭遇シタルコトハ未ダ1回トテ覺エナシ。之レヨリ見テ他人ニモソノ例甚ダ罕ナルコト、推測ス。今ヤソノ

1例ニ遇ヘリ。」ト云ハシメシ如キ稀例ナル産褥熱ニ因ル轉移性眼炎ノ2例ニ、幸運ニモ予ハ相前後シテ遭遇セリ。依ツテ茲ニ追加報告セントス。

## 2. 症 例

第1例 小○幸○。26歳。初産婦。

初診 昭和19年12月16日。

現病歴 12月9日夜、39°.5Cニ發熱ト共ニ惡寒戰慄アリ。コノ状態ノマ、12日朝8ヶ月ニテ死産セリ。發熱ト同時ニ胸部、四肢ニ赤色疹ヲ認め、14日本院谷野内科ニ入院、内科ノ紹介ニテ兩眼ノ發赤ヲ訴へ、當科ノ應診ヲ需メタリ。

内科診斷 敗血症。

産科婦人科診斷 産褥熱。

眼健見 (内科病室ニテノ觀察ナルガ故ニ正確ナル斜照法ハ之ヲ行ヒ得ズ。)右眼ノ眼瞼腫脹、結膜充血、毛様充血著明ニシテ、球結膜ハ中等度ニ浮腫セリ。角膜前層ニハ著變ナキガ如キモ、角膜後面ニ於テハ瀰漫性ニ膿様滲出物附着シ、特ニ角膜縁ヨリ約1mm距リテ角膜全周ニ瓦リテ輪狀ノ濃厚ナル附着物アリ。前房ハ強ク濁濁シ、膜様灰黄色ノ滲出物ノ他、灰黄色絮狀ノ滲出物亦極メテ多シ。瞳孔ハ極度ニ縮小、滲出物ノ

間隙ヲ透シテ散見シ得ル虹彩ハ紋理甚ダ不鮮明ニシテ、恰モ褐色泥狀ノ感アリ。水晶體前面ノ滲出物ノ爲、硝子體、眼底ハ窺ヒ得ズ。左眼ノ結膜並ニ毛様充血輕度ニシテ、前房水僅カニ濁濁セルホカ、他部ニ異常ナシ。

經過 血液ヨリノ細菌培養ニテ白色葡萄球菌ヲ証明。眼局所ニハ「ジオニン」、「アトロピン」、溫罨法ヲ施シ、全身的療法ハ内科ニテ行ヒタリ。左眼ノ前房濁濁ハ初診ヨリ2日ニシテ肉眼的ニ消失セルモ、右眼ノ瞳孔縁ハXII時ノ部ニテ僅カニ散大セルホカ、他ハ悉ク水晶體前面ニ應著ス。視力ハ右、眼前手動、左、3m指數。ソノ後漸次右眼ノ前房内滲出物ハ吸收サル、ニ至リ、初診ヨリ10日ニシテ視力ハ3m指數ニ恢復セシモ、白内障ヲ併發、初診ヨリ63日ニシテ右ニ眼前手動、左ニ0.07(0.9×-4D)トナレリ。眼歴ハ初診ヨリ18日ニハ右ニ17mm Hg、左ニ16mm Hg、63日ニハ右ニ30mm Hg、左ニ22mm Hg。初診ヨリ6ヶ月ニシテ治療ヲ打

切リタルモ、右眼ハ虹彩後癒着、併發性白内障ヲ貽シテ全治シ、兩眼ノ視力ハ63日目ト同一ナリキ。

本例ニテハ眼疾發生時期不明確ナルガ故ニ、嚴密ニハ取血症ニ於ケル轉移性眼炎ト謂フベキナランカ。

第2例 高○洋○ 22歳 初産婦。

初診 昭和20年2月6日。

現病歴 昭和19年12月5日、満月ニテ人工分娩ヲ行ヒ、ソノ際多量ノ出血ヲ認メタリ。8日突然惡寒戰慄ト共ニ40°Cノ發熱アリテ、胸部、四肢ニ發疹ヲ生ジタリ。ソノ後約1週間發熱續キ、爾後一時解熱セルモ28日ヨリ再度發熱シ、29日本院谷野内科ニ入院ス。

内科診断 敗血症。

産科婦人科診断 産褥熱。

血液ノ細菌培養ニヨリ肺炎双球菌及ビ葡萄狀球菌ヲ証明シ、谷野内科ニテ全身的療法ヲ受クルモ、漸次四肢、下腹部等ニ膿瘍ヲ形成スルニ至リ、昭和20年2月6日、兩眼ノ視力減退ヲ訴ヘテ當科ニ診ヲ需ム。

眼處見 右眼ノ結膜充血並ニ毛様充血ハ輕度ナルモ、險裂ニ一致シテ巾約1mmノ角膜潰瘍ヲ認ム。即チ兎眼性角膜潰瘍ナリ。角膜下縁ヨリ約1mm高ニ及ブ黃色ノ前房蓄膿アリ。左眼ニ於テハ角膜潰瘍ナキモ、ソノ他ノ狂狀ハ右眼ヨリ強度ニシテ、角膜下縁ヨリ3mm高ノ前房蓄膿アリ。瞳孔ハ兩眼トモニ極度ニ縮小シ、微照不能ナリ。

經過 眼局所ニハ「ジオニン」、「アトロピン」ヲ併用セルモ、初診ヨリ8日目ニシテ鬼籍ニ入レリ。

### 3. 考按並ニ總括

外國ニテハ産褥熱ニ因スル轉移性眼炎ハカナリ頻度ノ高キモノ、如クナルモ、我が國ニテハ河本教授(大6)、高橋氏(大8)、中垣氏(大11)ノ三報告ノミノ如クニシテ、河本教授例ハ既往歴ヨリ産褥熱ニ基因セルモノト推定サレシモノニテ、教授ノ許ヲ訪レタル時ハ既ニ眼球ハ萎縮セル状態ナリキト。本症ハ斯カル稀例ナルヲ以テ、症狀ソノモノハ平凡ニ過ギザルモ、敢エテ報告セル次第ナリ。Graenourニヨレバ、患者ノ大部分(78%)ハ經産婦ニシテ通例2~4回ノ出産ヲ經タルモノ多シトサルハモ、予ノ2例共ニ初産婦ニシテ、從ツテ年齢モ亦若年ナリ。Graenourノ記載セル處ニヨレバ、年齢ハ平均33年半ニシテ、25歳以下ハ4人ナリトセル處ヲ以テシテモ、予ノ症例ハ稀例ト云ハザルベカラズ。中垣氏例ハ25歳ノ初産婦ナリ。

病原菌ハ高橋氏例ニテハ連鎖狀球菌、葡萄狀球菌ヲ證明シ、中垣氏例ニテハ塗抹標本ニテ細菌ヲ證明セズトナシ、河本教授例ニテハ記載ナ

シ。外國ニテハ連鎖狀球菌ヲ見ルコト多キガ如キモ、予ノ第1例ニテハ白色葡萄狀球菌、第2例ニテハ肺炎双球菌、葡萄狀球菌ヲ證明セリ。

生命ニ對スル豫後ハ兩眼ノ侵サル、時ハ極メテ惡ク、85%ノ死亡率ガ計算サレ、片眼ノ時ハGraenourハ58%、Axenfeldハ66%ノ死亡率ヲ呈示セリ。而シテ兩眼ノ侵サル、場合、平均第2眼ノ罹患後6日ニテ死亡ストサレタリ。予ノ第2例ハ實ニ8日ニシテ死亡セルモノニシテ、既往ノ統計ニ一致シ、第1例ハ極メテ幸運ナル例ナリ。

ナホ予ノ興味ヲ惹キシ點ハ、第1例ノ初診時ニ於ケル角膜後面ノ附着物ノ状態ナリ。即チ、日常經驗スルコト多キ老人環ノ發生部位ニ相當シテ、特ニ濃厚ナル附着物ヲ角膜後面ニ見タルコトニシテ、患者ハ仰臥位ニアリタルヲ以テ前房内滲出物ノ角膜後面ニ沈着スルニ當リ、斯カル状態ヲ呈セルモノナランモ、カノ輪狀膿瘍ヲ想起スル時、甚ダ興味アル處見ナリトス。

### 4. 結 論

予ハ26歳及ビ22歳ノ初産婦ニ發生セル産褥熱ニヨル轉移性眼炎ヲ經驗セリ。前者ハ片眼ニ虹彩後癒着、併發性白内障ヲ貽シテ恢復シ、後者

ハ初診後8日ニシテ鬼籍ニ入レリ。

終リニ齒ミ、種々御指導、御校閱ヲ賜リタル恩師會知教授ニ深謝ス。

(本論文ノ要旨ハ第93回金澤眼科集談會ニテ報告セリ。)

文 獻

大日本眼科全書, VIII/2.

---